



## 食卓は快樂の場となり得るか

中田, 帆波

---

**(Citation)**

美学芸術学論集, 19:128-155

**(Issue Date)**

2025-03-31

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/0100495561>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100495561>



## 食卓は快楽の場となり得るか

中田帆波

Honami NAKATA

### はじめに

食べるという行為は、その人に関する多くの情報を提供する。所作が美しいか、何を美味しいと感じるか、いま食べているものにどれほど言及するか。これらは、その人が過去にどのような食卓を経験したかを如実に語つてしまふ。そうであるから、育ちの異なる者たちが同じ食卓に居合わせた場合に、何らかのトラブルが生じやすくなることは想像に難くない。ここで筆者は、食卓はどうして快楽の場となり得るのかと疑問に思う。

快楽 plaisir という言葉は、近代フランスの美食家ブリア・サヴァラン (Jean Anthelme Brillat-Savarin, 1755-1826) の著作『味覚の生理学 *Physiologie du goût*』(一八二五)からの引用である。本著において、「食の快楽 plaisir de manger」と「食卓の快楽 plaisir de la table」は区別されている<sup>1</sup>。食の快楽とは、飢えや食欲が満たされたという「現実的かつ直接的な感覚 le sensation actuelle et directe」である。他方で、食卓の快楽とは、食べる場所やモノや人などから生じる「省察的な感覚 le sensation réfléchie」である。つまり、空腹が満たされたあとで「頭が明晰になり、想像力が刺戟

され、気のきいた言葉が口をついて出、つぎつぎと会話が弾む<sup>2</sup>。ときの持続的な幸福感のことである。このとき人々は、単なる「飲食者 *consommateur*」から愉快な「会食者 *convive*」に変わっている。サヴァランの言葉から分かることは、食卓の快楽とは、偶然的の産物というよりも、設えられたものであるということだ。そこでは、場所の選定や料理の準備はもちろん、それに触発された人々がし始める周囲への気配りなど、能動的な関わり合いが求められている。私たちは、これらのことをどれだけ実践できているだろうか。

ところで日本人にとっては食卓を楽しむという考えが新しい。石毛（二〇〇五）に依れば、日本では長らく折敷や膳といった個人別の食卓が用いられていた。大正時代末から昭和のはじめにかけてチャブ台が普及するのに合わせてようやく、複数人が一つの食卓に集うスタイルが一般化されていく<sup>3</sup>。そこで初めて「団欒（だんらん）」の思想が主張されるようになる。これはイエ制度に基づいた儀礼的な食卓や、武士から商家の使用人や明治以降の軍隊にまで引き継がれた、（勤労時間を無駄にしない）早飯を美德とするような禁欲的な食事観を否定することを主眼としている。以上のことから分かるように、団欒は、家族という単位を基本として語られた思想である。サヴァランが想定する「会食者」は家族に限定されない<sup>4</sup>ので、食卓の快楽と団欒を等しく扱うことは難しい。

そこで筆者は、夫婦という関係性に着目する。夫婦とは、多くの場合、別々の家族のなかで育った他人同士だからだ。本稿では、食通としても知られる小津安二郎（一九〇三—一九六三）監督の映画『お茶漬の味』（一九五二）における夫婦の食卓を分析することによって、育ちの異なる者同士が共に食事することはどうして難しいのかを詳らかにする。そして、その困難を快楽へと転じる方法について考える足掛かりをつくりたい。

## 小津安二郎『お茶漬けの味』における食卓

小津安二郎監督の映画『お茶漬けの味』における食卓には、地方出身で夫の佐竹茂吉（四二歳）と上流家庭の出身である妻の妙子（三二歳）、そして女中のふみ（二二歳）のあいだにある力関係が透けて見える。妙子は、茂吉と見合い結婚をしてからも大磯にある実家から金銭的な援助を受けて学生時代からの友人たちと遊び惚けている。野暮つたい感じがする夫が不満で、かれを池で泳ぐ「大きくてノソノソ」した鯉に擬えて、アラレを投げ与え、笑う。茂吉は妙子の暮らしぶりに口を出すことはせず、好意的な夫婦関係を諦めてしまった態度でいる。ふみはいかにも女中らしく控えめに振舞って、茂吉と妙子の関係性に口を出すことはない。しかし二人のあいだの蟠りを助長しないように、食卓の準備ひとつをとつても細心の注意を払っている。

佐竹家の食卓では、何が起こっているのだろうか。順に確認してみよう。

### 一・余裕のある食卓

石毛（一九八二）は日本人の食卓が「快樂の追求」へと向かう徴候として、米飯の量が減っておかずの品数が増えること、そして食事に長い時間をかけることを挙げている。佐竹家では、その両方が揃っていることが確認できる。

蓮實（二〇一六）が指摘するように、小津は料理にかんする視覚的情報を排除しがちだ。それゆえに、ちやぶ台の全貌を知るのには難しい。茂吉が食事をする一連の動作を観察して、分かる範囲のことを記述してみる。ちやぶ台の上には二人分の、コロッケのような揚げ物二つと付け合わせ二種が載った丸皿、角皿（料理は不明）、小鉢（料理は

不明)、たくあんが入った小皿、蓋つきの汁椀、湯呑、箸箱が、向かい合うように置かれている。その境界付近に深皿(料理は不明)、その周りに醬油差し、ガラス瓶(中身は不明)が置かれている。また、ちゃぶ台の側に座るふみを囲むように、何も載っていない丸盆、お代わりの汁物が入った鍋、米櫃、蓋つきの茶碗二つと急須が載った角盆が配置されている。

食卓を整え終えたふみが、妙子の部屋をノックして「旦那さま、お食事お待ちになつてらっしゃいます」と告げてから(1:22)、茂吉が米飯を口にするまで(1:33)には、一分一六秒かかっている。場面一は、居間に戻つてきたふみがちゃぶ台の側に控えてから(a)、茂吉が米飯を口にするまでの、一連の動作を示したものである。ふみから茂吉へ米飯の受け渡しがどのように行われるのか、ふみに注目して確認してみる。

茂吉から「めしよそつてくれ」と言われたふみは「はい」と返事をして、角盆に載せていた茶碗の蓋を開ける(b)。茶碗を持ち上げる(c)。茶碗を丸盆に載せる(d)。妙子がまだ来ていないことを気にして、襖のほうを見る(e)。米櫃の蓋を両手で開ける(f)。左手に茶碗、右手にしゃもじを持って、米飯をよそう(g)。繰り返す(h)。茶碗を丸盆に載せる(i)。茶碗が載った丸盆を両手で持ち、茂吉に差し出す(j)。茂吉が茶碗に左手を伸ばすのを見計らつて、自分の左手をひっこめる(k)。丸盆をもとの位置に戻す(l)。米櫃の蓋を両手で閉める(m、n、o)。はじめの控えの姿勢に戻る(p)。ふみは抑制された無駄のない動きをしているが、米飯を手渡すただけに一二の手数(b-m)を要している。

このゆとりは、大阪の長屋で暮らす夫婦の倦怠期を描いた成瀬巳喜男『めし』(一九五一)の食卓と比べるとよく分かる。場面二を参照して欲しい。サラリーマンの夫から米飯を催促された専業主婦の妻は「はい」と土間で返事

をする(a)。壁に掛かっていたしゃもじを右手でとって、ちゃぶ台へと向かう(b)。しゃもじを持った右手をちゃぶ台について座り(c)、座り終えると同時にその手で米飯の入った鍋の蓋を開ける(d)。しゃもじを持ったままの右手で逆さに重ねられていた茶碗を取り(e)、それを左手に持ち変える(f)。米飯をよそう(g)。繰り返す(h)。左手で持った茶碗を顔に近づけ、米飯を匂う(i)。右手を添えて、ちゃぶ台に茶碗を置く(j)。夫の使う箸を箸箱から取りだす(k)。妻は米飯をちゃぶ台に置くまでに六の手数(d-h, j)しか要していない。これはふみの半分である。

## 二. 連帯する地方出身者たち

先述したとおり、佐竹家の食卓には豊富なおかずが準備されている。また家族が食卓に揃うのを待ち、さらに女中が丁寧に配膳することを許されたゆつたりとした時間が流れている。しかしながら、地方出身の茂吉にはそのような条件を利用して食卓を楽しむことが習慣化されていない。このことは、ふみから米飯を受けとって、それを口にするまでの茂吉のようすから確認できる。ふたたび場面一を参照して欲しい。

茂吉は煙草をふかし、新聞を読みながら食事を待っている(a)。ふみに「めしよそつてくれ」と頼むと同時に煙草をふかすのをやめて、両手で持った新聞に目を落とす(b)。ふみが米飯をよそうために米櫃の蓋をあけて、米櫃の縁に立て掛けたとき、木製の米櫃と蓋が触れ合ってポンツと音を立てる。ふみが米飯の入った茶碗を丸盆に載せた微かな音を聞いた茂吉は(c)、まず目だけでその位置を確認する。目は米飯を追い続けたまま、右手を新聞から離し(d)、左手で新聞をちゃぶ台に置くとすぐに、盆の上の茶碗に手をかける(e)。

ふみはこのとき小さくお辞儀をするように背を傾ける。茂吉はそれに「あア」と相槌する。この相槌は、シナリオには含まれていない。茂吉は長野県、ふみは埼玉県の出身で、茂吉はとりわけ「田舎」への愛着が深い。たとえば茂吉は、戦死した幼馴染の弟である岡田(二六歳)の保証人をしている。そして彼が就職試験に臨んだことを受けて、「這入れたら、すぐ田舎の方へ知らせてやるんだな」と発言する。また妙子の留守中には、茂吉の部屋に布団を敷きに来たふみに対して「兄さん豫備隊の試験どうしたい？」と尋ね、配属が仙台であることが分かると「お父さんお母さん困るだらう」と言つて、田舎に残されたふみの両親を慮っている。小泉(二〇一一)に依れば、女中は都会生活のノウハウを習得しながらも、気質としては素朴で働き者の田舎気質であり続けることが理想とされていた。<sup>10</sup> 裕福な暮らしに埋没しない茂吉は妙子以上に、田舎出身という共通点があるふみに対して精神的に近いものを感じているようだ。茂吉とふみは、主人と女中の間柄であるから米飯の受け渡しは盆を介してしか行われぬ。しかし米飯を渡すこと、受けとることのあいだに、毎日の繰り返しのなかで培われた身体的な間合いの一致以上の、呼応の表現がみられる。

そうして左手で米飯を受けとった茂吉は、すぐに視線を新聞へと移して、そのまま茶碗をちゃぶ台の上に置く(f)。新聞から目を離し、右手で汁椀の蓋を開ける(g)。ちゃぶ台の上で、蓋が独楽のように回る音がする。左手で汁椀を持ち上げ(h)、一口だけ啜る(i)。左手で汁椀をちゃぶ台に置くと同時に、右手で既に開いていたと思われる箸箱から箸をとり出す(j)。右手に箸で、左手に持った茶碗のなかの米飯を掴む(k)。それが口のなかに入るとき、目線はまた新聞へと戻っている(l)。米飯を受けとつてからの茂吉は(f—l)、ふみを無視して、食べることに、新聞を読むことに集中している。興味深いのは、先述したように、ちゃぶ台の上には複数のおかずが並んでいるにも

関わらず、茂吉が食べるのは（この食卓の場面全体を通して）米飯と汁物とたくあんだけであることだ。長野県では昭和三〇年代前半頃まで箱膳を用いる家庭が多く、一汁一菜だけの食卓が一般的であった。<sup>11</sup> 妙子を待っていてすつかり「腹へつた」茂吉が自然に欲求するのは、コロッケではなくて、子供の頃から慣れ親しんでいる食べ物のほうである。<sup>12</sup> かれに見えている食卓は、ちょうど箱膳と同じだけの範囲なのだろう。

### 三．食べる茂吉とそれを観察する妙子

すつかり油断している茂吉は、妙子が合流したあとも閉鎖的な食事を止めることができない。ついには、妙子に以前から注意を受けていた「猫まんま」<sup>13</sup>を流れるように作って食べてしまう。その手つきの何気なさによって、妙子は茂吉が未だ日常的に猫まんまを食べている可能性に思い当たる。そしてふみに「いつも旦那さま、犬にやるご飯みたい<sup>14</sup>に、こんなにして召し上がるの？」と問い詰め、やがて食事にまつたく手をつけないままその場を離れる。小津はこの場面に、茂吉の食べる仕方についてシナリオに記述している。場面三は、そのト書きと実際の映像を対比して示したものである。これを参照しながら、妙子の茂吉に対する嫌悪がどのように膨らんでいくのかを確認する。

自分の部屋から食卓へとやって来た妙子は、茂吉の向かいに「黙つてすわり、茂吉の食べるのを黙つて見てゐる」。茂吉は新聞を読むために、左肩を落とした状態で米飯を食べている。米飯を食べることに対する注意は薄弱で、口に近づけた箸のあいだから米飯が茶碗へと落ちていく（a）。箸には、微量の米飯が付着したままである（b）。茂吉が箸をなぶると（c）、箸に付着していた米飯が茶碗へと落ちる（d）。妙子は左肩を吊り上げながら、じつと茂吉を観察する。それまで妙子の肩越しに見えていただけの茂吉の様子がクローズアップされたことにより、妙子の観察がいつ

そう鋭くなってきたのが分かる。

茂吉は新聞から目を離すことなしに、米飯を口に含み（e）、米飯がこぼれるのを防ぐようにして（f）、箸を舐める（g）。茂吉はやつと妙子の視線に気づいて顔を上げ「君、食べないの？」と尋ねる。妙子は箸箱を開けて箸をとりに出すが、そのまま茂吉を観察し続ける。茂吉は「ガツく」と、二秒間（二・三〇―二・三二）のうちに米飯を二度かきこむ（h―j）。このときの茶碗のブレはそれまで（e―g）と比べて小さく、かきこむという動作がとても短い時間のあいだに行われたことが分かる。米飯を口に含んだあとで、茶碗の中身を確認するようにピタッと制止する（k）。茂吉の視線はいつの間にか新聞から離れており、米飯を食べることに夢中になっている。茂吉は米飯に具入りの味噌汁をかけて、八回ほど箸で混ぜ合わせる。そうして猫まんまが完成すると、「うまそうに」食べ始める。茶碗に口をつけて吸い込み（l）、咀嚼しながら茶碗の中身を箸で混ぜ合わせる（m）。ふたたび茶碗に口をつけて吸い込み（n）、口からはみ出た汁を右手で拭う（o）。

妙子はいかに痺れを切らして「そんなご飯の食べ方、よしてちょうだい！」と低い声で咎める。茂吉は「やめるよ。」と返事するが、「うつかりかけちゃった」と猫まんまの残りが入っている茶碗をのぞき込むときの表情がニヤついている（p）。その残りを「ザクく」と食べ始めるとき、「うまそうに」食べていたときと比べて茶碗のかぶり方が小さくなっている。猫まんまを茶碗から口へと流し込むのではなく、箸で小まめに掬っているのだ（q、r）。これは、妙子に対する遠慮を表している。ところが茶碗の中身を混ぜ合わせた（s）後から、箸の頭の振れ幅が大きくなっていく（t、u）。茂吉の関心は、妙子を気遣うことよりも、猫まんまを味わうことのほうに移行してしまう。案の定、妙子は手に持っていた箸を投げ捨てるようにして、食卓を離れる。

「奥さんに叱られちゃった……。」と言う茂吉は、依然としてニヤついている。そしてふみに茶碗を差し出し、お代わりを要求する。そのあとの二人の会話で、ふみが田舎では猫まんまを食べていたが、佐竹家では「奥さまがおきらい」という理由で食べないようにしていることが発覚する。茂吉は「さうか……フム……。」と言いながら、米飯を「ボソ〜」と食べ始める。このときは味噌汁はかけず、たくあんを途中で齧るのみである（y）。米飯を口に入れたあとで（v、w）、箸を舐るのはこれまでと同様である（x）。茂吉はふみにも、新聞にも目を向けず、考え事をするように食べ続ける。ふたたび茂吉の閉鎖的な食卓が始まる。

#### 四、会食者たち

これまで確認してきたように、佐竹家では食卓を楽しむための物質的な条件が揃っているにも関わらず、茂吉も妙子もサヴァランが述べる「会食者」にはなり得ていない。妙子を待ちきれずに食事を始めた茂吉が、その空腹を満たそうとするとき、かれが幼い頃から身につけてきた習慣が露わになる。それは箸を舐るといふ無作法な様子や、ちやぶ台全体を把握することができない視野の偏狭さ、田舎でよく食べていた猫まんまの愛好だ。他方で、妙子はそんな茂吉の観察者である。彼女は、猫まんまを「犬にやるご飯」と断じて、それを夢中になつて食べる茂吉の様子に嫌悪の感情を膨らませる。またそのように判断する自分の感性には何の疑いも持っていない様子である。

茂吉は、空腹が満たされてからも、妙子と食卓を共有することを意識しない。そして注目すべきは、妙子が猫まんまについて言及したときに薄ら笑っていることだ。この一連の茂吉の態度は、食べ（続け）ることを通じた、妙子に対する抵抗の意思表示だと考えられる。この食卓のあとでは、次のような会話が為される。

茂吉「子供の時から田舎であゝやつて育つたもんだから、知らないでやつてたよ。別に悪いとは思はなかつたんだ」

妙子「悪いとは申上げてをりません」

茂吉「いや、もうやめるよ。——しかし、どうして、ことごとくにさうなんだな？」

(中略)

茂吉「僕の場合、なんて云つたらいいかな、インテイメートな、もつと、プリミテイヴな、遠慮や體裁のない氣易い感じが好きなんだよ」<sup>15</sup>

茂吉はタバコの銘柄は「朝日」、汽車は三等に乗ることを好む。それは猫まんまと同様に「安いばかりでなく、これが僕にはうまい」からである。そして「結局僕の育ちの問題」で、「君は今のまゝで構はないんだ」と言つて妙子から距離をとる。以上のことから分かるのは、佐竹家の食卓が階級のせめぎ合い場となつてゐることだ。妙子は茂吉に対して猫まんまを食べる事を禁止するが、それはその行為が「悪い」からではなく、育ちの違いに基づく趣味の相違を認められないからである。この時点で薄っすらと自覚している。この喧嘩をきっかけに妙子は家出をしたため、海外出張に向かう茂吉を見送ることができなかった。茂吉と入れ違いで帰宅した妙子は、そのことを友人らにひどく咎められる。しかし茂吉は飛行機の故障で夜遅くに帰宅したので、夫婦は再会する。「腹へつた」という茂吉に付き合い、妙子は一緒にお茶漬を食べることにする。

女中たちが寝静まった台所をウロウロして、二人でお茶漬の準備をする。お茶漬は、その構造が猫まんまにそっくりで、それを妙子が一緒に食べるということは、茂吉に対する譲歩であることは間違いない。場面四に示したように、妙子が「パン、どを？」と聞くと(a)、茂吉はお茶漬を食べる手真似をしながら「これだよ、お茶漬——」と答える(b)。妙子はつぎに冷蔵庫からハムをとり出し、「これどを？」と聞く(c)。茂吉は首をひねって「お茶漬」と言い、微笑む(d)。この繰り返しの問答は、茂吉の食べたいものがお茶漬であることが互いに分かったうえで行なわれている。妙子の提案する食べ物も徹底して洋風で、趣味の違いを敢えて強調している。妙子はそれを逆手にとつて、茂吉に必ず拒否されるというゲームを楽しんでいるのである。その後、場面五に示したように、二人は着々とお茶漬を食べるのに必要なものを揃えていく。妙子は湯を沸かすためにコンロに火をつけ(a)、茂吉は米櫃を見つめる(b)。妙子はさらに糠床を見つけて(c)、茂吉に見守られながら糠床から取り出した胡瓜を包丁で切る(d)。場面六は、台所からちゃぶ台へ移動した後の二人の様子を示している。茂吉は、米飯をよそった茶碗を妙子に手渡そうとするが(a)、ふと視線を上げて妙子を見ると(b)、妙子が食べるにしている米飯の量が多すぎることに気づく(c)。米飯の量を減らして(d)、再び茶碗を妙子に差し出す(e)。妙子がそれを受けとる(f)。茂吉とふみは丸盆を介して茶碗の受け渡しを行なったが、茂吉と妙子は手から手に茶碗を受け渡している。そしてついに茂吉はお茶漬を食べる。小津は、茂吉が猫まんまを食べる場面と同様に、茂吉の食べる仕方についてシナリオに記述している。場面七は、そのト書きと実際の映像を対比して示したものである。「うまさうに」という指示は、茂吉が妙子の存在を忘れてすっかり猫まんまを食べる様子と共通しているが(【場面3】110)、茶碗の傾きを比較すると、妙子に叱られた後で猫まんまの残りを遠慮がちに「ザク／＼」食べる様子(【場面3】111)のほうが似ている。また猫ま

んまの美味しさが口からはみ出た汁を拭う仕草によつて表現された一方で、お茶漬けの美味しさは「うまい……」という実際の発言によつて表現されている。視線は妙子のほうへと向けられている。お茶漬けを食べる仕方とその美味しさの表現の違いから分かることは、この食卓において相手の趣味に譲歩しているのが妙子だけではないということだ。場面八に示したように、糠床の匂いが手に移っていることに気づいた妙子は（a）、それを茂吉に伝えると（b）、茂吉は「どら……」と言つて（c）、その匂いを嗅ぐ（d）。妙子の手は、ちゃぶ台の中央より先まで伸びており、茂吉も身を乗り出すようにしている。茂吉の視野は、ちゃぶ台の向こうに座っている妙子にまで広がっている。場面九は、それが嬉しくてたまらないかのように、お茶漬けを一口食べるたびに茂吉に視線を向ける妙子の様子を示している。小津は、ここで妙子と茂吉に共通して「サラ〜」と食べるように指示している。場面一〇に示されているように、二人は同時に同じ仕方でお茶漬けを食べている。それは飲食者と観察者の関係ではなく、会食者たちと呼び得る関係なのではないだろうか。

## おわりに

本稿では、小津安二郎『お茶漬けの味』における食卓の分析を行なった。注目すべきは、そこで描かれる夫婦の対立と和解が、女中の在否と連動していることだ。女中によつて整えられた食卓に集ったときの茂吉と妙子は、目の前に並べられた料理を消費するだけである。結果的に、食べる仕方などといった育ちの問題にスポットが当たってしまったところだが、女中に頼らず、自分たちで整えた食卓に集った二人には、糠床の匂いが手に移っていることに気づくなどといった、これまでにない会話の引き出しが生まれている。そしていつの間にか、共通の所作を身につける

までに至っている。これは、たとえば作法書のような外部から与えられたものではなく、二人の間からおのずと立ち現れたものである。

夫婦の和解は、妙子の茂吉に対する全面的な譲歩に条件づけられている。それは、男尊女卑の考えに裏打ちされたものではなかったか、また上流家庭で培われた趣味は批判の対象でしかあり得ないのかという疑問を抱かせる。しかし筆者がこの作品で注目したいのは、茂吉と妙子とともに台所に足を踏み入れ、女中が担っていた役割を引き受けた点である。つまり、どちらか一方ではなく、どちらもが元の立場を離れて、同じ立場を共有した点である。食卓を準備する過程を共有することは、育ちの違いに基づく趣味の相違に拘泥することを回避し、食卓を快楽の場へと導くために有効な手段だと言えるのではないだろうか。



【場面 1】 ふみ f



【場面 1】 ふみ g



【場面 1】 茂吉 b、ふみ h



【場面 1】 茂吉 c、ふみ i



【場面 1】 茂吉 d、ふみ j



【場面 1】 茂吉 a、ふみ a



【場面 1】 ふみ b



【場面 1】 ふみ c



【場面 1】 ふみ d



【場面 1】 ふみ e



【場面 1】 茂吉 j、ふみ p



【場面 1】 茂吉 e、ふみ k



【場面 1】 茂吉 k、ふみ q



【場面 1】 茂吉 f、ふみ l



【場面 1】 茂吉 i、ふみ r



【場面 1】 茂吉 g、ふみ m



【場面 1】 茂吉 h、ふみ n



【場面 1】 茂吉 i、ふみ o



【場面 2】妻 e



【場面 2】妻 a



【場面 2】妻 f



【場面 2】妻 b



【場面 2】妻 g



【場面 2】妻 c



【場面 2】妻 h



【場面 2】妻 d



【場面 2】妻 i



【場面 2】妻 j



【場面 2】妻 k



【場面3】 妙子



【場面3】 a



【場面3】 e



【場面3】 b



【場面3】 f



【場面3】 c



【場面3】 g



【場面3】 d

【場面3】 妙子、黙つてすわり、茂吉の食べるのを黙つて見てゐる

茂吉、ガツクく食ひ

うまざうに食ふ



【場面 3】 l



【場面 3】 h



【場面 3】 m



【場面 3】 i



【場面 3】 n



【場面 3】 j



場面 3-o



【場面 3】 k



【場面 3】 t



【場面 3】 p



【場面 3】 u



【場面 3】 q



【場面 3】 r



【場面 3】 s

茂吉「やめるよ。——うっかりかけちやつた」と残りをザク／＼食ふ



【場面3】v



【場面3】w



【場面3】x



【場面3】y



【場面 5】 a



【場面 4】 a



【場面 5】 b



【場面 4】 b



【場面 5】 c



【場面 4】 c



【場面 5】 d



【場面 4】 d



【場面 6】 e



【場面 6】 a



【場面 6】 f



【場面 6】 b



【場面 6】 c



【場面 6】 d



【場面8】 a



【場面7】

【場面7】 茂吉、お茶漬けにして、うまさうに食ふ



【場面8】 b



【場面7】



【場面8】 c



【場面7】



【場面8】 d



【場面 10】



【場面 9】



【場面 10】



【場面 9】



【場面 10】



【場面 9】



【場面 9】

【場面 10】 そしてまた、サラく〜と食べる

【場面 9】 お茶をかけてサラく〜食べる

註

- 1 プリアール・サヴァラン『美味礼賛』玉村豊男訳、新潮社、二〇一七年、二〇一―二二三頁。
- 2 同右、二〇四頁。
- 3 石毛直道『食卓文明論―チャップ台はどこへ消えた?』中央公論新社、二〇〇五年、一五八頁。農村部でのチャップ台の普及は都市部に比べて遅く、昭和九年にピークを迎える。
- 4 育ちとは、何か一つの要因によって決定されるものではない。しかし食に関しても、生まれ育つときの経済状況が大きく影響することは明らかである。橋本(二〇二三)は、人々を経済的地位に応じてグループ分けしたものを「階級」と呼ぶ。かれに依れば、第二次世界大戦後の日本における階級格差は大きめに、経済が復興して住の日系人が企画したララ物資の到着やアメリカからの小麦緊急輸入によって戦後の食糧難から脱出し始める一九四七年から、スーパーマーケットが開店するなどして食料品が低価格で普及するようになる一九五七年までの一〇年間で、もっとも食べることの格差が大きかったと推測される。この時期には、米よりも小麦の流通が多くなったことの影響で、ラーメンやスパゲティなどといった新たな食文化が生まれた。食べ物や飲食店のパラエティが豊かになっていくのに対して、人々の食に対する好みも細分化されていく時期とも言える。『お茶漬の味』はちょうど同じ時期に製作された作品であり、「食べることを通して夫婦の対立と和解を描いている点で注目に値する。
- 5 石毛直道『食事の文明論』中公新書、一九八二年、二六一―四一頁。
- 6 蓮實重彦『監督小津安二郎』ちくま学芸文庫、二〇一六年、四八頁。
- 7 当時はまだ油を使った料理は裕福な家庭にしかなかった。また別の日の献立は「グラム・チャウダ」で、妙子がそれを楽しんでいることが分かる台詞がある。佐竹家の献立は、妙子の趣味に合わせた洋風のものが多いようだ。
- 8 『お茶漬の味』が夕食であるのに対して、『めし』が朝食であることには注意が必要だ。しかし、新聞を読みながら米飯を催促する夫と、それに対するリアクションとして比較対象になり得る。
- 9 この音だけはひじょうに際立って聞こえる。これは先述したように、ふみが茶碗という音の鳴りやすいものに対してよく注意を払っていることを示している。また反対に、音が聞こえることに着目すれば、居間が静謐であることが分かる。静謐であるということは、閑静な住宅街に居を構えることのできる佐竹家の裕福さを表している。茂吉とふみは鍋ひとつだけしか離れておらず、茂吉はこの映画の観客以上にさまざまな音を聞き取っているはずだ。
- 10 小泉和子『女中がいた昭和』河出書房新社、二〇二二年、五九―六一頁。これは、女中が最も身近だった昭和初期(から一九三五年半ば頃まで)にもてはやされた女中訓の内容である。女中訓は、一冊の書物として著されることもあれば、雑誌『主婦之友』や『婦人倶楽部』等に記事として掲載されることもあった。『お茶漬の味』が製作された一九五〇年代には既に女中の待遇改善を求める運動も展開されていたが、ふみの働きぶりは戦前の女中訓の内容に違わない。女中の理想像はつ

まるところ当時の女性の「あるべき姿」であったから、茂吉がふみに対して好意的であることが、田舎出身であるという共通性だけに因るのかは曖昧だ。

11 箱膳とは、一人分の食器類が収められた箱型の膳である。ひっくり返した蓋のうえで食事をする。

12 茂吉は、岡田に誘われて「カローリ軒」というトンカツ屋を訪れている。貴田（二〇〇三）が指摘しているように、岡田はフーメンや焼き鳥等といった安くてうまいB級グルメが好きな青年である。このトンカツ屋も、天津丼をメニューに並べるような庶民的な店だ。感想を求められた茂吉は「うん、うまかつた。満腹しちゃつた」と言っていて微笑む。茂吉にとってトンカツは岡田の就職を祝うハレの日の食事だが、岡田にとってトンカツは日常（？）的な食事である。たとえ同郷であっても一六歳の年の差がある二人では、都会生活に対する順応の仕方が異なっているようだ。

13 猫まんとは、「汁掛け飯」のことである。『日本料理語源集』（一九九〇）には、「飯に温かい汁をかけたもの。汁はすましと味噌汁と二通りあります。すましは煮出し汁五カップに、醤油大匙四・五杯くらい味の味。味噌汁の場合、味噌は地方により塩度が違います（）」と説明されている。

14 この「犬にやるご飯」という表現は、妙子が茂吉を池に泳ぐ鯉に喩えてアラシを投げ与える場面を連想させる。また成瀬巳喜男が本作と同様に中流階級の家庭を描いた作品『山の音』（一九五四）では、茹ですぎて「すり餌」の様になってしまったホウレン草を主人が食べるのを拒否する場面がある。食べる仕方に対する嫌悪は、食べる人を動物と結びつけることによって示されることが多い。

15 『キネマ旬報 六月上旬号』第二九号、キネマ旬報社、一九五一年、九四頁。

#### 参考文献

- 阿古真理 『うちのご飯の60年 祖母・母・娘の食卓』 筑摩書房、二〇〇九年。
- 石毛直道 『食事の文明論』 中公新書、一九八二年。
- 石毛直道 『食卓文明論―チャブ台はどこへ消えた？』 中央公論新社、二〇〇五年。
- 小津安二郎 『僕はトウフ屋だからトウフしか作らない』 日本図書センター、二〇一〇年。
- 表真美 『食卓と家族―家族団らんの歴史の変遷』 世界思想社、二〇一〇年。
- 片岡義男 『映画の中の昭和30年代』 草思社、二〇〇七年。
- 貴田庄 『小津安二郎の食卓』 筑摩書房、二〇〇三年。
- 小泉和子 『女がいた昭和』 河出書房新社、二〇一二年。
- 北大路魯山人 『魯山人味道』 中央公論新社、一九八〇年。
- 佐藤忠雄 『増補版 日本映画史2』 岩波書店、二〇〇六年。

- 諏訪正樹ほか『「間合い」とは何か 二人称的身体論』春秋社、二〇二〇年。
- ソルト、ジョージ『ラーメンの語られざる歴史』野下祥子訳、国書刊行会、二〇一五年。
- 中村幸平『日本料理語源集』冬草会、一九九〇年。
- 橋本健二『格差』の戦後史階級社会日本の履歴書【増補版】河出書房新社、二〇一三年。
- 橋本周子『美食家の誕生グリモと〈食〉のフランス革命』名古屋大学出版会、二〇一四年。
- 蓮實重彦『監督小津安二郎』ちくま学芸文庫、二〇一六年。
- 蓮實重彦『映画における味覚——小津安二郎の場合』『言語生活』三八二号、筑摩書房、一九八三年、四四—四五頁。
- 速水健朗『ラーメンと愛国』講談社、二〇一一年。
- 福田育弘『ともに食へるといふこと 共食にみる日本人の感性』二〇二一年。
- ブリアーサヴァラン『美味礼賛上』関根秀雄ほか訳、岩波書店、一九六七年。
- ブリアーサヴァラン『美味礼賛下』関根秀雄ほか訳、岩波書店、一九六七年。
- ブリアーサヴァラン『美味礼賛』玉村豊男訳、新潮社、二〇一七年。
- 松浦莞二ほか『小津安二郎大全』朝日新聞出版、二〇一九年。
- 三浦哲也『食べたくなる本』みずす書房、二〇一九年。
- 『キネマ旬報 六月上旬号』第三九号、キネマ旬報社、一九五二年。
- 『信州ながの 食の風土記——未来に伝えたい昭和の食——』長野県農村文化協会編、農山漁村文化協会、二〇一三年。
- Brilat-Savarin, Jean Anthelme, *Physiologie du goût, ou Méitations de gastronomie transcendante. ; ouvrage théorique, historique et a l'ordre du jour, dédié aux gastronomes parisiens, par un professeur, membre de plusieurs sociétés littéraires et savantes.* Tome I, Paris, chez A. Sautetlet et Cie libraires, 1826. <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/pt6b6k45501p2rk-64378-0> (二〇一五年三月一五日最終閲覧)

#### 参考資料

- 小津安二郎『お茶漬けの味』(一九五二年)、デジタルリマスター修復版、松竹株式会社、小津安二郎名作コレクション、二〇一〇年(DVD)。
- 成瀬巳喜男『めし』(一九五一年)、通常版、東宝株式会社、二〇〇五年(DVD)。
- 成瀬巳喜男『山の音』(一九五四年)、通常版、東宝株式会社、二〇〇五年(DVD)。